水辺の神話―アシ・ミソサザイ・イルカ―

荒川　理恵

豊葦原

日本神話の世界観として、人間の住むこの世界・国土は、高天原・根の国と対比して、「葦原中国」と呼ばれている。少し日本神話に興味を持つ人であれば、日本神話の物語る国土の成り立ちといえば、イザナキ・イザナミによる国生みを思い起こすであろう。しかし、現代でも新銀行の名前にも使われたように、日本国の美称「豊葦原の瑞穂の国」と言う呼び名は広く知られ、親しまれている。「アシ」という水辺のありふれた植物は、国生みの前段階にある天地開闢にあらわれる。

天地が初めて別れ地がまだ脂のように水の上に浮かび、くらげのように漂っているところに、葦の芽の萌え出すような生命力が、神となって現れた。『古事記』では次のように言う。

天地初めて発けし時、高天原に成れる神の名は、天之御中主神。次に高御産巣日神。次に神産巣日神。此の三柱の神は、みな独神と成り坐して身を隠したまひき。

次に国稚く浮きし脂の如くして、海月なす漂へる時、葦牙の如く萌え騰る物に因りて成れる神の名は、宇摩志

阿斯訶備比古遲神。次に天之常立神。此の二柱の神も亦、独神と成り坐して、身を隠したまひき。
上の件の五柱の神は別天神。

宇摩志阿斯訶備比古遲神（『古事記』）あるいは可美葦牙彦舅尊（『日本書紀』一書第二・第三）と表記されるウマシアシカビヒコヂは、天地開闢において現れた神の一柱である。

『日本書紀』本文では

故曰はく、開闢くる初に洲壤の浮れ漂へること、譬へば游魚の水上に浮けるが猶し。時に天地の中に一物生れり。状葦牙如し。便ち神爲る。國常立尊と號す。次に國狹槌尊。次に豐斟渟尊。凡て三はしらの神ます。乾道獨化す。所以に、此の純男を成せり。

として、「状葦牙如」とあり生まれた神の名は「クニノトコタチ」と異なるが、葦の芽生えはこの世の成り立ちの根本に関わっている。「国常立」も、国家の将来の永劫の安定・発展を求める気持ちをこめて充てたもので、漢字の字義にとらわれずに音によって考えれば、「トコ」は「床」すなわち土台であって、「土台（大地）が出現し、大地が姿を表わす意」だという。」また「ヒコヂ」ももとは泥の意を表す古語であったが、口承・書承されるうちに人格化され、ヒコヂと音が傾倒して成立したものと考えられている。そして「乾道獨化す。所以に、此の純男を成せり。」とは、陽の気のみを受けて生まれた神なので、男の神であるというほどの解釈がされているが、アシというイネ科の植物の芽生えの形状と勢いから、「ヒコジ」という陽神と思われる名を負ったのであろう。

アシは、緩く脆弱な泥の中に芽吹いて、葉はあくまでも天を目指し、根は地面の下を絡み合って固まろうとする。ウマシアシカビヒコヂがアシそのものを神格化したものではないにせよ、アシの芽吹きによって、混沌の中に、垂直方向・上／下・天／地という方向性が生まれた。

また「葦原中国」は「秋津島」「大八洲」とも呼ばれるが、アキツは水生昆虫の代表格であるトンボの事であるし、「洲」の意味するところは、砂洲に見られるように土砂の堆積して水面から現われたところというものであるから、国土の周

りは水で囲われ、水によってファジーな境界を以って仕切られているとイメージされる。

生物学に、《植生遷移》という植物の育成に従って環境が変化し、植生も変化するというモデルがあるが、葦原はその内の、《湿性遷移》というモデルの中で、水域が湿原へ遷移する重要な過渡期にある。経年によって葦原の面積が拡大し、朽ちたアシが土となり、地域全体の保水量が減少していけばやがて湿原から草原化し、場合によっては森林化という《乾性遷移》へと移行する。葦原は、豊かな生物相、今時の言い方で言えば生物多様性を支える基盤となるものなのである。

国土の生成は、神代七代の末に来るイザナキ・イザナミによる国生み、「修理固成」から開始されるが、その大本である「葦原」という豊かな水の循環する世界は、その前のウマシアシカビヒコヂから始まったともいえるだろう。

水稲栽培

プラントオパール解析法の開発により、現在では、日本列島における稲作の開始は、六千年以上前・縄文時代中期以前と考えられるようになってきた。しかし、それは水田耕作ではなく陸稲として焼畑での栽培であり、畑作である以上、連作障害を伴うものであった。水田での稲作の優位性は、塩害や連作障害を避けることができる点にある。およそ七千年前の縄文海進の原因は、最終氷期の終了後に起きた世界的温暖化であり、海面は現在より2～3ｍは高かったと考えられている。このため、日本列島の海沿いの平野部は奥深くまで水没し、関東平野には香取海や奥東京湾を形成した。このことはすなわち、もともと山がちな日本列島において、近現代的な耕作地として適当な平野が無い事を意味する。その後寒冷化して再び海退がおこると、平野部が現われるのである。

こうしたことから、近年では、陸稲としての稲栽培や水陸未分化の稲の栽培経験の蓄積が縄文時代になされていたところに、気候変動の結果（縄文時代に比べて気温は低下したものの）収量が圧倒的に増加する水稲栽培の技術が受け入れら、伝播し、弥生時代が始まったと考えられている。灌漑式水田による水稲栽培とは、つまりは土木工事・干拓技術である。山が急峻で鉄砲水の被害が激しいような土地では、水田経営は困難になる。しかし、水は確保しなければならない。緩やかな水の流れを持つ葦原の湿地帯は、水田開拓の適地といえる。

池を作り、溝や放水路として河川を付け変えることは、古代から行われていた。池を作れば、過剰な水は池に向かって排水され、貯水された水は旱魃の備えにもなる。掘り取られた土砂は微高地として造成され、居住区域として水難を避けることができる。

『日本書紀』の崇神天皇六十二年秋七月に、

六十二年秋七月、乙卯朔丙辰、詔して曰く、農は天下の大なる本なり。民の恃みて以て生くる所なり。今河内狭山の埴田水少し。是を以て其の国の百姓農事に怠れり。其れ多に池溝を開りて、以て民の業を寛めよ。冬十月、依網池を造る。

とある。

河内の狭山では水が足りないために水田耕作が出来ず農民が農を怠っているから、池や溝を作ろうといって、「冬十月、依網池を造る。十一月、苅坂池・反折池を作っている。これが記録された日本最古の用水池の造成である。

狭山方面から流れる西除川の河水の一部などを集水して、池の北部および東部の中位段丘の耕地開発や灌漑のために築造されたとかんがえられている。この大規模な灌漑用水工事は、湿原の開拓ではないが、依網池は、宝永元年（一七〇四年）の大和川付け替えによって分断され、池底のほとんどが順次潰廃されていったものの、昭和四十四年、大阪府立阪南高校のグラウンド用地として埋め立て整地されるまで、周辺地域の農地を潤し、養魚場も営まれていた。実に千五百年あまりの長きに渡っての使用に耐える、巨大な池を造成する技術があったのである。

この依網池は、『古事記』『日本書紀』共通にほぼ同一の内容で、歌にも詠まれている。応神天皇の代、天皇が日向の髪長媛を召し上げ、宴の席で皇子の大鷦鷯尊（＝大雀命・オホサザキ）にヒメを賜るという件で、オホサザキの感謝の心を詠んだ歌である。

水たまる 依網の池の 堰杭打ちが 刺けく知らに 蓴繰り
延けく知らに 我が心しぞ いや愚にして 今ぞ悔しき （『古事記』）

水たまる 依網の池に 蓴繰り 延けく知らに 堰杭築く 川俣江の 菱茎の
さしけく知らに 吾が心し いや愚にして 《『日本書紀』》

ヌナハ（＝ジュンサイ）やヒシが繁茂する豊かな池である依網池であるが、そのほとりには池を補修管理するために堰の杭を打つ人が居る。ジュンサイは、現在でも酢の物や吸い物の実として、その寒天質の粘液に包まれた若芽を食用としているし、ヒシの実もでんぷん・たんぱく質に富んだ貴重な食物で、強壮・健胃の薬効があると漢方薬膳では珍重されるという。

ミソサザイ

オホサザキは、応神天皇の亡き後、弟で皇太子であったウジノワキイラツコと帝位を譲り合った末に即位し、仁徳天皇となる。この皇子の名のサザキとは、野鳥のミソサザイのことで、全長十一センチメートルほどの日本で見られる野鳥の中で、キクイタダキとともに最小種の一つとされる。

オホサザキの名の由来は仁徳天皇即位紀元年に記されている。要約すれば、仁徳天皇はその誕生時に、産殿にミミズクが飛び込んできたという不思議があり、父である応神天皇が武内宿禰に問うたところ、それは吉祥であり、同日、武内宿禰にも息子が生まれ、同様に産屋にミソサザイが飛び込んできたという。そして天皇が皇子と大臣の子が同日に生まれ、吉祥を天が表わしたものだと考え、鳥の名を持って交換して名づけ、後の世までのよしみとしようと提案したという話である。

このサザキとツクの名の交換については、既に古川のり子氏が『ツクとサザキとモズの神話―仁徳紀の分析―』二で、サザキが民間伝承の中で、賢明で太陽と結びつきの強い鳥と捉えられている事をあげ、他の神話との構造的な対応関係の中で、名前の交換の意味するところ、即位元年の記事として位置づけられる根拠を詳細に分析しておられる。筆者は、古川氏のご高説に全面的に肯く者であるので、以下には、氏が触れられなかった鳥のミソサザイについての習性などを

取り上げてみたい。

鳥のミソサザイの名は、「小さい鳥」という意味の古語「サザイ」がてんじたもので、ミソは溝・小川の意味である[三]。渓流沿いを好み、小さな身体に似合わず声量も大きく、長くさえずり続けるという。オスは自分の縄張り内に複数の巣を作る一夫多妻で、オスは営巣のみを行い、抱卵、育雛はメスが行う。巣の構造は、出入り口が正反対に二つあるという特徴的なものだが、材料は苔や獣毛で、外側をオスが、内部の仕上げをメスが行い完成させる。二つの入り口は、外敵に襲われた時の脱出口と考えられている。

この小さな鳥は、西欧でも「鳥の王」とされ、フランス語で roitelet(小君主)、スペイン語で reyezuelo(小王)、ドイツ語で Zaunkönig(垣根の王)と呼ばれる。スコットランド民話に、一番高く飛べたものを鳥の王にするというものがあり、ミソサザイは機知を使って、ワシの背に乗って空高く舞い上がり、王となる[四]。空の高みにある太陽との親和性を暗示しているようにも思われる。

ところで、鳥が産屋に飛び込むことを武内宿禰は吉兆であると判じたわけだが、平林章仁氏はウガヤフキアヘズの誕生の物語をひいて、

> 新生児に新しい霊魂を運んでくると信じられた鳥（この場合は鵜）の羽根で産屋の屋根を飾る呪術と、その鳥（霊魂）を招き入れるために産屋の屋根の一部を葺き残しておく習俗を、神話的に表現したものである。この神話が発展すれば、霊鳥が直接産室にとびこむことになる。

と述べておられる[五]。古川氏が論じられたように、サザキは賢明で太陽と結びつきが強い鳥だと考えられている。さらに言えば、イワノヒメの嫉妬を恐れながらも、日向髪長媛を妃とし、後には八田皇女を皇后とし、また雌鳥皇女も妃としようとする、王者の資質である色好みの一面も持っている。

応神天皇の発案で、ツクとサザキは名を換えたわけだが、交換が無ければオホサザキ＝仁徳天皇は即位する事はなかったかもしれない。

名前の交換

ところで、武内宿禰に子ども達の名前の交換を提案した応神天皇は、自らも太子の時代に名前の交換を行っている。『日本書紀』では詳らかではないとしているが、『古事記』では禊ぎを目的として近江若狭をめぐった時、敦賀でイザサワケが夢に現われ、名を換える約束を結んでいる。

故、武内宿禰命、その太子を率いて禊ぎせむとして、淡海また若狭国を経歴しとき、高志の前の角鹿に仮宮を造りて坐さしめき。ここに其地に坐す伊奢沙和気大神の命、夜の夢に見えて云りたまひしく、「吾が名を御子の御名に易へまく欲し。」とのりたまひき。ここに言ほきて白ししく、「恐し、命の随に易へ奉らむ。」とまをせば、またその神詔りたまひしく、「明日の旦、濱に幸でますべし。名を易へし幣献らむ。」とのりたまひき。故、その旦濱に幸行でましし時、鼻毀りし入鹿魚、既に一浦に依れり。ここに御子、神に白さしめて云りたまひしく、「我に御食の魚給へり。」とのりたまひき。故、またその御名を称へて、御食津大神と号けき。故、今に気比大神と謂ふ。またその入鹿魚の鼻の血臭かりき。故、その浦を号けて血浦と謂ひき。今は都奴賀と謂ふ。

応神天皇は、生まれた時から腕の肉が靫（弓を射るための装身具）のような形に盛り上がっていたため、ホムタワケと呼ばれたという。この伝承があるため、この『古事記』の気比大神との名換えの説話も分かりにくくなっている。『日本書紀』本文でも詳らかでないと書かれ、イザサワケ、ホムタワケの二つの名がそもそもどちらのものであったのかも混乱することになっている。はっきりしているのは、ツクとサザキの明確な交換と異なり、神の申し出を受諾した太子が「名を易へし幣」として神から贈られた、鼻の傷ついて血の流れ出たイルカを受け取り、御食津大神と神の名を名付けたということだ。

一見意味の解らないこのやり取りだが、太子は「名」と「魚＝な」を掛けたやり取りと理解し、「御食津大神」と名付けて、神功皇后のもとに帰っていく。かえってきた太子を迎え入れるため皇后は大宴会を催し、杯を捧げ祝いの言葉をもって迎える。

忍熊王を欺くためとはいえ、太子も神功皇后も喪船を立て、死んだものとして振舞っていた。また忍熊王と、五十狭茅宿禰は琵琶湖に入水して自ら命を絶った。そもそもの目的はこうした死の穢れを祓うための禊ぎであって、ホムタワケは武内宿禰とともに、近江・若狭の水辺を巡っていたのだろう。そして敦賀に至り、穢れを祓い流すだけでなく、神との誼を得て帰ってきた。その証がひときわ大きな魚・イルカである。そこでことさらに太子を言祝ぐ歌を歌い、神酒の司で常世に居るスクナヒコナの特別に醸した酒を捧げたのだ。

注

一　坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋『日本書紀』岩波書店　古典文学大系　補注1-六および頭注

二　古川のり子　『東アジアの古代文化』七十四号　一九九三年

三　菅原浩・柿澤亮三 編著　『図説 鳥名の由来辞典』　柏書房　二〇〇五年

四　三宅忠明再話・山本常一絵　『わしとみそさざい　スコットランドの昔話』こどものとも年少版　福音館書店　一九七九年一〇月号
　ジェーン・グドール再話・アレキサンダー・ライヒシュタイン絵　百々佑利子訳　『ワシとミソサザイ』さ・え・ら書房　二〇〇一年四月

五　平林章仁『鹿と鳥の文化史　古代日本の儀礼と呪術』白水社　一九九二年九月